「一学徒」としての鴎外：『三田文学』という"場"を視座とした鴎外関連資料報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須田, 喜代次 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1332

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「一学徒」としての鷗外

――『三田文学』という〝場〟を視座とした鷗外関連資料報告――

須田喜代次

I 「森先生の手紙」

一九二二（大正十一）年七月九日の鷗外森林太郎の死から五箇月余、一九二三年一月からその最初の全集である『鷗外全集』（鷗外全集刊行会）全十八巻の刊行は開始される。以後『鷗外全集』は発行元を岩波書店とし、①一九三六（昭和十一）年一月から一九三九（昭和十四）年十月にかけての三十五巻本（著作篇二十二巻、翻訳篇十三巻）、②一九五一（昭和二十六）年六月から一九五六（昭和三十一）年二月にかけての五十三巻本（著作篇三十三巻、翻訳篇十八巻、別巻二巻）、そして③一九七一（昭和四十六）年十一月から一九七五（昭和五十）年六月にかけての三十八巻本といった形態で、都合三回刊行されてきている。その第三次岩波版『鷗外全集』に新たな資料を増補して刊行された二刷（一九八六（昭和六十一）・十二～一九九〇（平成二）・一）が、最新の『鷗外全集』ということになる。

その最初の鷗外全集刊行会版の『鷗外全集』から、「編纂同人総代」として関わり、以後の岩波版全集においても一貫して編輯者に名を連ねるのが、小島政二郎である。[1] 一八九四（明治二十七）年一月生の彼は、一九二三年当時まだ満二十

九歳だったことになる。

その小島が『鷗外全集』の編纂に関わるそもそものきっかけとなったのが、一九一六（大正五）年十一月の『三田文学』に発表した「オオソグラフィイ」と題したエッセイであることは、小島政二郎「森鷗外」（『鷗外荷風万太郎』（文藝春秋新社、一九六五・九）所収）がこのエピソードを綴ることから始められていることでもあり、広く知られていることだろう。この時小島は満二十二歳、慶應義塾大学部文学科の学生であった。この年（一九一六）四月永年勤めた陸軍を退官し予備役となっていた一方の鷗外は、既に五十四歳になっている。小島の「オオソグラフィイ」を介して始まった、三十歳以上も歳の離れた二人の交流の初発を、同文発表の翌十二月の『三田文学』誌上に、小島は「森先生の手紙」なる一文において書き留めている。

周知のことではあろうが、ことの順序として、発端となった「オオソグラフィイ」を押さえ直すことから始めたい。これは「近頃の新聞　雑誌、単行本の類を読むと、無闇に誤字、当字、仮名遣の誤が目につく」という一文で始まり、当代文壇諸家の文章上の誤りを指摘したものである。「オオソグラフィイ」（orthography 正書法）と題した所以であるわけだが、「この二三日少し暇があつたので、諸先生方の誤字調べをやつて見た」として、夏目漱石を筆頭に、田山花袋、島崎藤村、正宗白鳥、中村星湖、徳田秋聲、田村とし子、森田草平、高濱虚子、木下杢太郎、谷崎潤一郎、永井荷風と錚々たる「先生方」をその俎上に上げた小島は、十三人目・その最後に鷗外についても、次のように指摘した。

○森　林太郎氏

つひ△……する　　つい……する
はい△る　　はひる
震え△てゐる　　震へてゐる
剜（えぐ△）つた　　ゑぐつた

……のせい△　　……のせゐ

この時点（一九一六年）からすればすでに八年の昔ということになるはずだが、他ならぬ鷗外が一九〇八（明治四十一）年五月臨時仮名遣調査委員会委員を命ぜられていた男だったことを、この時の小島が認識していたかどうか分らない。[2] しかしこの時点では既に慶應義塾を去っていたとはいえ、『三田文学』誌上で荷風の「誤字」（鷗外は右に記した五例だが、荷風は二十四例指摘されている）を堂々と指摘して憚らない[3]姿勢を含めて、物怖じしないこの青年の真摯な〈若さ〉はすがすがしい。そうした思いは鷗外のものでもあったのだろうか、彼は、当時はまだ無名であったこの青年の指摘に早速反応するのである。それが、現岩波版『鷗外全集』第三十六巻に書簡番号「九九九」（以下「「九九九」書簡」と略記）として収録されている、一九一六（大正五）年十一月三日付の小島政二郎宛鷗外書簡である。『三田文学』一九一六（大正五）年十一月号は、奥付に拠れば「大正五年十月三十日印刷納本／大正五年十一月一日発行」。だから鷗外書簡は印刷納本日から換算しても四日後には投函された事になる。そしてそれは、以下の如きものだった。

拝呈小生仮名遣の誤謬御指摘被下奉謝候
一、今言つい云々すると云ふついをつひに作るは大槻文彦の説に従ひし積りに候但し小生大槻君の説を誤解し居るものならんも知れず候
二、ハヒルはハヒイルの略にて我国には子音を省く例あり母韻を省く例多き原則よりハヒルとすると云ふが国語家の説と被存候小生はhahir を haïr とするアポストロフの例を応用する積りにて十余年前までハイルと書きし次第に候然るに名詞のハヒリは先例動し難きにより近年は動詞をもハヒルと書くことに改め候
三、フルエルは古言フルフなること勿論に可有之候古言のフルヘリ、フルヘルは全く別の意に候小生はこれも旧来アポストロフの例を采りfuru'er としたる積りに候此の如くして古言のフルヘリ、フルヘルと区別せんと試みし次第に候此仮名のみは右区別の目的を以て夙く竹柏園主人其他の忠告ありしに拘らず今も猶襲用し居候

四、今言の何のセイは人皆（所為）と書すれど小生は右セイの語源不明にて所為とは別なるものと考へ故意に記音法を用居候

右の如く小生は今に至るまで定見なく小生の今言の仮名遣は動揺し居候将来の為め何卒詳細御教示被下度願上候就中今言ツイの来歴今言のフルエルは古言のフルヘルと同一に書せざるべからざる理由（意義は全く別なるに）セイの何故にセヰなるかの説明等は特に御教示を煩し度奉存候

前述したようにこの時鷗外は満五十四歳、しかし彼は自分より三十歳以上も年下の若者に「御教示を煩し度」と書き送る事に何のためらいもない。「正直の話、私は学問の広大なことを、この手紙で初めて知らされた。グウとも言えない思いだった」とは、後年の小島の回想に他ならないが（前掲「森鷗外」。ただし引用は『小島政二郎全集』第三巻（日本図書センター、二〇〇二・二）に拠る）、そこにわたくしは「一学徒」としての鷗外の姿勢を見て取ることができるように思う。しかし全集を見れば容易に当ることができる書簡本文を、煩を厭わず全文引用したのはそのことを確認したかったからではない。この鷗外という人物の〈生〉の姿勢とも言うべきものを窺わしめる本書簡本文は、このままでは意味が通じないものであること、すなわち誤った本文を、わたくしたちは現全集に拠って読んできていたのだということこそ本稿で確認したいことなのである。

＊　　＊

第二刷での新たな追補を含めて鷗外書簡一六五通を収める現岩波版『鷗外全集』だが、その第三十六巻「後記」には「直接肉筆に当らず印刷物に拠ったものは前回同様（轉載）と記した」という注記がある。しかして右に紹介した「九九九」書簡には「（轉載）」の文字はない[4]。したがってこの記載を信じる限り本書簡は「直接肉筆に当」っての全集収録ということになるはずなのだが……。

とまれ、鷗外からその「九九九」書簡を受け取った小島政二郎は、本稿冒頭に述べたように、翌一九一六（大正五）年

十二月号（同年十二月一日発行）の『三田文学』に「森先生の手紙」を掲載したのだった。「自ら料らず前号にオヽソグラフィイと題する一文を公にしたところ、日頃崇拝する森林太郎先生から次のやうなお手紙を頂戴した」として書き起こされたそれは、引き続いて当該鷗外書簡を全文引用紹介している。当然それは「九九九」書簡であるはずなのだが、以下に見るように、表記を始め多くの点で違いがある。「九九九」書簡と相違する部分に傍線を付して引用してみよう。

拝呈　小生仮名遣の誤謬御指摘被下奉謝候。

一、今言ツイ①云々するといふツイ②をツヒ③に作るは、大槻文彦君の説に従ひし積に候。但し小生大槻君の説を誤解し居るものならむも知れず候。

二、ハヒルはハヒイルの略にて、我国には子韻を省く④例なく、母韻を省く例多き原則より、ハヒルとすると云ふが国語家の説と被存候。小生は hahir を ha'ir とするアポストロフの例を応用する積にて、十余年前までハイルと書きし次第に候。然るに名詞のハヒリは先例動し難きにより、近年は動詞をもハヒルと書くことに改め候。

三、フルエルは古言フルフなる事勿論に可有之候。古言のフルヘリ、フルヘルは全く別の意に候。小生はこれも旧来アポストロフの例を取り furu'er としたる積に候。此の如くして古言のフルヘリ、フルヘルと区別せんと試みし次第に候。此仮名のみは右区別の目的を以て、夙く竹柏園主人其他の忠告ありしに拘らず、今も猶襲用し居候。

四、今言の何のセイは人皆「所為」と書すれど、小生は右セイの語源不明にて所為とは別なるものと考へ、故意に記音法を用居候。

右の如く小生は今に至るまで定見なく、小生の今言の仮名遣は動揺し居候。将来の為め何卒詳細御教示被下度願上候。就中今言ツイの来歴、今言フルエルは古言のフルヘルと同一に書せざるべからざる理由（意義は全く別なるに）セイの何故にセキなるかの説明等は特に御示教を煩し度奉存候。

⑤十一月三日

森林太郎[6]

小島政二郎[7]様

六百余字の文章に傍線を施した箇所は全部で四十七箇所、かなりの数だ。もちろん見れば分るようにそれは句読点箇所が多くを占めており、これは小島が分りやすさを優先して意図的に施した可能性が大きいとは思われるし[5]、また句読点以外の相違部分も、右に見た小島引用書簡の記載の方が全て正しいなどと言おうとしているわけではわたくしは毛頭ない(実物を見ないでそのようなことが言えるわけもない)。がしかし、たとえば本書簡は葉書ではなく封書であるわけだから[6]、傍線部⑤・⑥・⑦の如く、書簡末尾の日付・署名・宛名は当然あってしかるべきもので、その記載のない「九九九」書簡はおかしいということになる。また同書簡「一」の部分の、傍線部①・②・③のカタカナ表記は、「二」以下に展開する叙述で問題になっている単語を鷗外が全てカタカナで記していることを考えれば、この「一」の部分のみ当該単語をひらがなで表記する「九九九」書簡より自然ではあるだろう。

しかしそうした細々した点以上に重要なのは、傍線部④である。なぜならば、これこそはこの形でなければ意味が通じないからだ。確認の為再度「九九九」書簡の当該箇所を引用する。

ハヒルはハヒイルの略にて我国には子音を省く例あり母韻を省く例多き原則よりハヒルとする……

繰り返すが、「子音を省く例あり」では文意が通らない。ここは小島引用書簡にあるように、「省く例なく」でなければならないところだ[7]。すなわちわたくしどもは、これまで意味が通じない文章を、文意不明の文章を、何の疑問も抱かずに鷗外のものとして読んでいたことになる。現岩波版『鷗外全集』の不備に関しては、すでに山崎一穎により的確な指摘がなされているが[8]、本稿冒頭に述べたように最初の『鷗外全集』[9]から、一貫して鷗外全集「編輯者」として関わっている小島政二郎宛書簡ですらこのような状況であることを、わたくしたちはもう一度銘記しておく必要がある。

Ⅱ　もう一つの「森先生の手紙」

先の一九一六（大正五）年十一月三日付鷗外書簡に対して、十一月七日付で小島は返事を書いたという。その内容も先に紹介した「森先生の手紙」は伝えている。そしてそれに対する返事が「翌日の夜」小島の元にもたらせられる。後年の筆になる小島「森鷗外」にはその折り返し鷗外から返事をもらった事実は記されるものの、書簡自体は引用されていない。しかるに「森先生の手紙」にはそれも全文引用紹介されている。この一九一六年十一月八日付小島政二郎宛鷗外書簡は、現『鷗外全集』未収録のものだ。すなわち現全集の編輯方針に従えば、この書簡は、書簡番号「一〇〇五」一九一六年十一月七日付賀古鶴所宛書簡と、同「一〇〇六」同年十一月九日付福田祿太郎宛書簡の間に、「十一月八日　小島政二郎宛（轉載）」として置かれるべきものということになる。そしてそれは以下のようなものである。Ⅰ章で述べたように、小島の引用の仕方には不安がないわけではないのだが、今は彼の引用に従うしかない。

拝誦仕候。早速詳細なる御答書を辱うし難有存候。高説の如くツイの大槻氏説は小生の記憶違に可有之候。小生は大槻氏がツヒニ（遂）の語と同源なるやう説きしこと、思ひ居たる次第に候。「ついたつ」、「ついゐる」の「ついたつ」、「ついゐる」なることは明白にして、小生と雖も必ず「つい」と書し居候。乍去今言のツイが右の古言と同じと云ふこと未だ腑に落ち不申候。只小生は今後記音的にツイを用可申存居候。御礼旁右御聞に入候。若し御高見も有之候はゞ御序に御示被下度候。

十一月八日

森　林太郎

小島学兄

辞令上の言い回しとはいえ、三十歳以上も年上の鷗外から「学兄」とされた小島の思いはいかばかりであったろうか。[10] しかし鷗外は年齢・身分といったものにこだわることなく、対等の立場でこの若者に接しようとしている。「諸君と私を一緒に集めて、小学校のクラスの席順のやう並ばせて、私に下座にすわつてお辞儀をしろと云ふことなら、私は平気でお辞儀をするでせう」という彼の言葉が思い起こされる（「予が立場」『新潮』一九〇九・十二）。さらに言えば、秋山光夫が伝える図書頭としての鷗外は、[11] 純粋に学問的な関心から「世間的でない」「学者を心から敬愛」していたというが、まさにその鷗外はここにもいる。

鷗外の八日付書簡を受け取った小島政二郎は、翌九日、再び鷗外に返信している。こうしたいわば学問的なジャブの応酬の中で、二人の間には確固たる信頼感が築かれていったに違いない。それは「史伝を出すにしても、全集を出すにしても、小島君が校正を手伝ってくれるなら、承諾しよう」という、春陽堂店員が伝える鷗外の言葉を裏付けるものでもある（前掲小島「森鷗外」）。小島が二十代でただ一人最初の『鷗外全集』編纂同人総代に抜擢されることになる関係は、[12] こうした学問的交流の中で培われていったと言えるのではあるまいか。

Ⅲ　「今後ドイツ語入の処丈私の方へ一度廻しては奈何ですか」

Ⅱ章までで述べた「オオソグラフィイ」（orthography）ということとは異なるが、やはり表記に関連して、鷗外が次のような書簡を『三田文学』編集部に送ったことが、一九一三（大正二）年九月号の『三田文学』「消息」欄に紹介されている。これも現『鷗外全集』未収録書簡であるので、まずはその書簡全文の紹介をしておきたい。

日付は一九一三（大正二）年七月三十日。これも前記同様現『鷗外全集』の編輯方針に従って整理しておけば、この書簡は、書簡番号「七五九」一九一三年七月二十一日付松原晙三郎宛書簡と、同「七六〇」同年十月九日付帝国軍人後援会

宛書簡の間に、「七月三十日　三田文学会宛　（轉載）」とでもしておくべきものということになる。

三田文学中「澤木」と云ふ人の文中、ドイツ語の植字がひどく違つて居ます、今後ドイツ語入の処丈私の方へ一度廻しては奈何ですか。

「消息」欄記事は、この書簡引用の前に「■七月三十日の日附で森先生から左の如き御親切なる御端書を頂戴した」とし、さらに右書簡紹介の後に、「まことに校正掛たる生等の申分なき次第である。茲に森先生の御厚意を感謝し、併て筆者及び読者諸氏に御詫を申しておきます」とする。署名は「三田文学校正掛」。

文中の「澤木」は、一九〇九（明治四十二）年三月、慶應義塾大学部文学科卒業後、同年九月より義塾普通部教員として英語を担当、さらに一九一二年七月から慶應義塾海外留学生として、西洋美術史および美学研究のため欧州留学中だった澤木四方吉（ペンネーム・澤木梢（一八八六（明治十九）・十二・十六～一九三〇（昭和五）・十一・七）に他ならないが、「「澤木」と云ふ人」という書き方からすると、鷗外はこの時点では、後に帰国後の彼から義塾文科刷新の相談を受けたり[13]、その著『美術の都』（日本美術学院、一九一七・十一）を献本されたりして懇意になる澤木とまだ面識はなかったようだ。

さてその「「澤木」と云ふ人の文」であるが、これは前号に当る『三田文学』一九一三年八月号（「大正二年七月二十八日印刷納本／大正二年八月一日発行」）に掲載された、澤木梢「Kandinsky の為に（評論）」ならびに同「看るがまゝ、聞くがまゝ（ミュンヘンより）」[15]（前者は「一九一三、五月二十八日ミュンヘンにて」、後者は「一九一三、五月二十八日夜ミュンヘンにて」との記載がその末尾に付されている）を指す。

同号には「澤木梢氏からミュンヘンのことを書いた「美術の都」が届いた。これは九月号に載せる。今月の挿絵は同氏から寄せられたものである。同人の洋行では同君が一番古顔となつた」（前記『三田文学』八月号「消息」）とあるように、「一九一三年春三月」「バイエルン国の首府ミュンヘンに移った」澤木は、「その年の夏休みを二ヶ月間パリに送った[16]のを

除けば、翌年八月大戦の始まるまで、ざっと一年半ここで暮らした」（『美術の都』、引用は一九九八年六月発行の岩波文庫版に拠る）のだという。帰国は一九一六（大正五）年、同年三月限りで義塾を去った永井荷風の後を受けて義塾教授に着任、合わせて『三田文学』の編集主任をも継ぐことになる。すなわち本稿Ⅰ・Ⅱ章で触れた小島政二郎「オオソグラフィイ」は　澤木編集主任の元での発表だったということになる。

さて先の鷗外書簡本文に戻ると、鷗外はこれを七月三十日付で投函している。前記八月号「印刷納本」日を勘案すれば、これまたいち早い反応であることが分る。先の「消息」欄に「今月の挿絵は同氏から寄せられたもの」との記述があったように、『三田文学』一九一三年八月号にはその巻頭頁に「ワグナー像除幕式」「ミュンヘン芸術座」と右隅に澤木の筆跡と思われる書き込みがある写真が二葉掲載されており、こうしたことも鷗外の食指を動かした一因かも知れない。

Ⅰ・Ⅱ章で取り上げた一九一六年十一月の鷗外は、同年四月に退官・予備役となっていて、その意味では比較的自由な時間に恵まれていたとも言えようが、この一九一三年七月時の鷗外は、まぎれもなく現役の陸軍軍医総監であり、陸軍省医務局長という多忙な職務に就いていた。それは「天皇陛下並に皇后陛下を新橋に迎へまつる」（七月二十五日）、「特命検閲使随員たりし秋山錬造、橋本監次郎の報告を聴く」（七月二十八日）、「朝軍医学校の入校式に蒞む。次いで陸軍省に往く」（八月一日）等の記述がその日記に続く日々なのである。その渦中にあって、しかし鷗外は『三田文学』誌掲載文のドイツ語スペルのチェックをしてもいいと申し出るのだ。

ドイツ語に不案内なわたくしが云々する資格は全くないのだが、前記「看るがまゝ、聞くがまゝ（ミュンヘンより）」には鷗外が一九〇八（明治四十一）年一月・五月・六月の『歌舞伎』誌上に翻訳連載したWedekindの「出発前半時間」が、Wedekind自身も「Gastspiel」（客演）として「先週一杯ミュンヘンのKammerspiel（「小劇場」）で演ぜられた」ことが伝えられている。このWedekindは、「椋鳥通信」に全五十回登場し、「最新独逸脚本梗概」（『スバル』一九〇九・九）に八篇の戯曲、「戯曲梗概四十七種」（田中榮三『近代劇精通』（籾山書店、一九一三・十二）所収）に一篇の戯曲の

梗概を紹介するなど、鷗外が関心を寄せていた作家だった。その「出発前半時間」の原題「Der Kammersänger」が「Kammersäuger」と誤植されてしまっていては、鷗外としては一言もの申さずにはいられなかったのであろう。因みに「sänger」は「歌手・声楽家」だが、「säuger」では「哺乳動物」になってしまう。

「校正掛」が恐縮するのは当然で、まさか現役の陸軍省医務局長に校正をさせたとは思えないが、こうした積極的な姿勢にも「一学徒」としての鷗外の有り様が窺えるのではないだろうか。学問の場（フィールド）で鷗外は煩を厭わない。「物を知る為めに学問をする、詰まり学問をする為めに学問をする」（「キタ・セクスアリス」）という姿勢は、ここにも貫かれている。

Ⅳ　「我家を刺れる小説あり」

実は前記『三田文学』一九一三（大正二）年九月号「消息」欄には、もう一通、佐藤春夫から「八月吉日」付で「三田文学校正方」宛に届いた「正誤申込書」が全文掲載されている（因みにこの佐藤書簡は、『定本佐藤春夫全集』第三十六巻（臨川書店、二〇〇一・六）に『三田文学』前掲号に掲載されたものであることを明記した上で、書簡番号「3」として収録されている）。これには「佐藤氏の正誤申込書は右の通りにて候ひき。まことに校正掛たる小生の唯々面目もなき次第にて候」云々という添え書きが付されているのだが、その署名がこちらは「三田文学校正掛（邦）」となっている。すなわちこれは当時同誌の編集実務を担当していた邦枝完二の文章ということになる（「邦枝完二氏は今度籾山書店の編輯部へ入られた」という記載が、『三田文学』一九一三年六月号「消息」欄にある）。ついでに言えば、だからⅢ章で紹介した鷗外書簡についてのコメントは、邦枝と共に同誌の編集実務を担当していたもう一人の人物、井川滋のものと考えられる。

一八九二（明治二十五）年十二月二十八日生まれの邦枝完二はこの時点でまだ満二十歳、この年（一九一三年）四月か

ら慶應義塾予科に籍を置いたばかりの若者だった。しかし前年一九一二年二月の『三田文学』誌上に「冬」（詩）を発表したのを皮切りに、同年九月には小説作品第一作として「廓の子」を同誌に発表、この一三年にも四月に「変化者」、八月に「蝙蝠安」そして十二月には戯曲「柳ちる日」を『三田文学』に、四月「似顔絵」、五月「人形の夢」を『朱欒』に発表という具合に徐々に文学者としての歩みを始めていた。Ⅲ章で取り上げた澤木文が掲載された、一九一三年八月号の『三田文学』などは、間に荷風の「厠の窓」（随筆）を挟んで、邦枝の前記「蝙蝠安」と鷗外の翻訳「Senzamani」が並んでいたのである。そしてまさにその八月、その邦枝が、鷗外を、森家を「刺」した小説を発表する。一九一三（大正二）年八月四日の『鷗外日記』に次のような記載がある。

伊庭孝来て砦一冊を示す。我家を刺れる小説あり。

鷗外は「砦」と記しているが、実際は『とりで』と表記するこの雑誌は、一九一二年九月、「演劇美術雑誌」と称して創刊されたもので、一九一三年十一月発行の第九号まで確認できるという（紅野敏郎「逍遙・文学誌（160）　とりで」『国文学』二〇〇四・十）。この一九一三年八月に発行されたのは第六号にあたり、鷗外に注進に及んだ伊庭孝は巻頭に「演劇の没理想主義」なる一文を寄せていた。その伊庭が示した小説こそ、同誌に掲載された邦枝完二「捺印」であったのである。

「我家を刺れる小説」とは、いささか穏当な表現ではないが、しかしこの表現があながち不当でないと思えるほど、いわばこの小説は鷗外を、そして森家を徹底的に揶揄した内容の小説になっている。以下その梗概を簡略に示してみよう。

冬木書房編輯員の新次（前記「廓の子」の登場人物に「新ちやん」なる人物がいて、この名は邦枝を髣髴とさせる）が、法学博士木村陣一郎（「木村」が鷗外「田楽豆腐」（『三越』一九一二・九）の主人公名であること、言うまでもない）の自宅を訪れるところから小説世界の幕は開く。彼の目的は、三日前に郵送し捺印をお願いして置いた、今度出版される木村の戯曲集『うらおもて』の奥付をもらって帰ることであった。この木村だが、かつては「軍籍に身を置いてゐた」のだ

が、今は「考（ママ）（引用者注、「老」ノ誤植カ）体の故を以て軍籍を引いて」いる人物で、「現代文壇の元老として、誰一人知らぬ者もない」大家であり、新次は「何よりも博士の仮名使ひといふことに敬服して」いるのだった。

さて彼が木村家に行くと、「格子戸の中には厳格だと定評のある博士の家にしては余りのことだと、一歩身を引いて眺める程、靴や下駄や草履が目茶目茶に散らかつてゐた」。その様を見て新次は「世間の噂といふものは」「とても当にはならない」と思う。そして肝心の奥付の捺印なのだが、「なに本屋かい、少し待たせておゝき」という「夫人の声」が聞こえる中、さんざん待たされたあげく彼の前にもたらされたものは、一枚も捺されていない千二百枚の奥付だったのである。結局新次は「空腹と腹痛とを堪えつゝ」その千二百枚の奥付に一人で「捺印」する羽目になってしまう。その間お茶一杯恵まれない。周りは徐々に暗くなってくる。「しかし電気は愚か、蝋燭の灯さへも恵まれない」。こうしてやっと「捺印」し終えた新次は、「冷い目でわが身のあはれをいたはりながら、半は自己を茶化して見るやうな気になつて、重い奥付を抱えたまゝ股一杯に元来た坂を降りて」行く。

どうだろうか。拙い梗概で恐縮だが、これだけでも鷗外が「我家を刺れる小説」としたのも肯けるのではあるまいか。もっとも邦枝はその最後に「これは新次といふ男が、まだ神田の本屋にゐた頃――三年ばかり前――の話しである。しかし彼はこの話しを終ると同時に、卑怯にも例（いつも）の癖のやみ難く、「実は夢だよ短夜の」と、とう〳〵今日もまた夢にしてしまつたのである」と逃げを打っているのではあるが。

なぜ邦枝がこのような小説を書いたのか、そのモチーフが分らない。直近の戯曲集ということで言えば、鷗外は一九一三（大正二）年三月に『新一幕物』を籾山書店から刊行しているが、「邦枝完二氏は籾山書店の営業部に入られた」という記述が『三田文学』「消息」欄に載るのが一九一三年の五月号であるので、この刊行に邦枝が関わった可能性は低い。またこれ以前の鷗外と邦枝の接点も今のところ見つけられない。

ところで、「捺印」末尾には「二年六月末」という脱稿日の記載がある（これは前記『三田文学』一九一三年八月号掲

載「蝙蝠安」末尾記載の脱稿日と同じである)。この脱稿日を参考に『三田文学』「消息」欄を探ってみると、一九一三年七月号の同誌同欄に「邦枝完二氏は六月十五日徴兵検査で国民兵に合格す」という記事にぶつかった。前述したようにこの年満二十歳に達していた邦枝完二はまさに徴兵適齢であったわけだが、その結果が「国民兵に合格す」ということであったようだ。「国民兵」は「現役兵には適しないが国民兵役に適する者」、すなわち「丙種」合格ということになるのではないか。こじつけを承知で敢えて言うのだが、この「丙種」合格というわだかまりが、あるいは現役の陸軍軍医総監へ向けられたのかも知れないとするのは、下衆の勘ぐりというものだろうか。

とまれ鷗外はこの「我家を刺れる小説」に関しては、一切無視の態度を貫いた。また管見に入った限りでは、同時代評を含めてこの「捺印」が何らかの話題に登ったこともないようだ。この作品がそれだけのインパクトを持つものだとも思えない。ただ後に「おのが文名を売るためには、如何なる手段も選ばずといふならば、それも亦一種の勇敢なる行為だといへぬこともない。が、名のありて質なき者の如何に多きかを考へる時、心ある者の暗然たるも当然ではないか」と書き、「それがもし真の文明人であるならば、第一に礼節を識るべきだ。況んや一国の文化を左右し得る文筆の士に於ておや」(「偏奇館去来」『双竹亭随筆』(興亜書院、一九四三(昭和十八)・三)所収)と記す邦枝は、この若き日の自己の行為をどう捉えていたのだろうか。以後鷗外に関しても、「捺印」に関しても、邦枝の言及をわたくしは知らない。

もう一つ、気になるのはその邦枝が「恩師」と呼ぶ永井荷風がこの作品のことを知っていたかどうかだ。当時邦枝は、この作品が書かれる直前の一九一三年五月十四日から、毎月一回のペースで第二火曜日の夜荷風邸で開催され始めた「火曜会」の発会当初からの主要メンバーの一人だった。この「火曜会」は「おの〳〵自作のものを読だり批評したり」(『三田文学』「消息」一九一三・六)という目的で始められたようだが、はたしてこの席上で「捺印」が話題となったことがあっただろうか。実は『三田文学』一九一二年十月号の寄贈雑誌欄には『とりで』(これは同年九月発行の創刊号だと思われる)の名が見えるのだが、以後は一切なく、この記述を信じるなら『とりで』が三田文学会に寄贈されたのは一冊だ

けであったようだ。しかしそれは当然のことながら、荷風が読まなかった確証にはならない。ならないのだが、しかし、後年の発言ではあるが、「最も博士の偉大なる貢献は、人も知る大正二三年ころ出版の『一幕物』その他である」（「鷗外博士のこと」『演藝画報』一九二二・八）と特にその戯曲集に高い評価を与える荷風が、邦枝のこの作品を読んで何のリアクションも起さないとは考えにくい。したがってわたくしは現段階では、荷風は愛弟子ともいうべき邦枝完二の「捺印」には目を通す機会がなかったと考える。

＊　　＊

見てきたように、『三田文学』という〝場〟は、若い様々な優れた個性・才能が交錯（スパーク）する刺激的な〝場〟だった。この現場からの刺激が、鷗外「豊熟の時代」を醸し出す貴重な起爆剤の一つであったことは間違いない。

注

（1）他に平野萬里が全ての『鷗外全集』の編纂に関わっている。

（2）後のことになるが、一九二〇（大正九）年、小島は鷗外から「仮名遣意見」の抜刷りを直接もらっている。以て鷗外の小島に対する厚き信頼を確認できるだろう。

私は「秘」の朱印の捺してある先生の「仮名遣ひ意見」の抜き刷りを持っている。明治四十一年六月二十六日、臨時仮名遣調査委員会第四回の席上で先生のした演説を、「その夜速記者を招きて再演し速記せしめしものを、小林又七に命じて印刷せしむ」と先生の日記にあるそれだ。

私は先生自筆の帯封も保存してある。最後のページに朱墨で、

此印刷物ハコレガ最後ノ一部デアリマス、ドウゾ御手許ニ保存シテ置イテ下サイ

庚申五月十八日　　森林太郎（花押）

庚申の年は大正九年に当る。そうすると、先生逝去の前の前の年である。（小島政二郎「森鷗外」）

（3）荷風は『文明』一ノ九（一九一六（大正五）・十二）掲載「毎月見聞録　十月中旬より十一月中旬まで」において、「□十一月

一日　小島政二郎三田文学誌上に文士の仮名遣ひに盲せる事を指摘す」と記している。しかし小島が書き留める「オオソグラフィイ」に対する荷風の反応は、以下の如くである。

前々から荷風は「文士の文字を知らざる」などと書いて嘆いていたので、私のつもりでは、外の誰も読んでくれなくても、荷風だけは褒めてくれるだろうと思っていたのだ。

ところが、翌月の「文明」――「三田文学」を出て行くと間もなく荷風の始めた雑誌――を見ると、私の「オーソグラフィ」について悪口を浴びせているではないか。反対理由なんか一ト言も書いてないのだ。ただ罵詈讒謗をほしいままにしているだけだった。（小島政二郎「永井荷風」。前掲『鷗外荷風万太郎』所収。ただし本文はやはり『小島政二郎全集』第三巻に拠る）

（4）現『鷗外全集』に収録されている小島政二郎宛鷗外書簡は全部で二通。「九九九」書簡以外のもう一通は、書簡番号「一四六二」の一九二一（大正十）年五月二十四日付のもので、こちらには「（轉載）」の注記がある。因みに「一四六二」書簡の内容も、仮名遣い・表記に関するもので、鷗外は小島の一文「オオソグラフィイ」をきっかけに以後彼とこの方面に関する関心を共有していったようだ。

（5）実物に当らないで軽々な物言いは慎まねばならないが、全集収録の鷗外書簡を見る限り、自身の子供たちへの手紙を除いて、書簡において、鷗外は話題を代える際に「〇」記号を使うことはあっても、句読点は使用しないことが多い。しかしこれも決め手にはなるまい。

（6）小島は慶應義塾教室に塾僕によって届けられたこの鷗外書簡について、次のように述べている。

「お手紙です」

そう言って、上が白、下が青の二重封筒の手紙を差出した。見ると、墨で「三田、慶應義塾内、三田文学会、小島政二郎様」とあり、裏を返すと、「団子坂、森林太郎」とあった。（小島政二郎「森鷗外」）

（7）同書簡は前述小島「森鷗外」にも引用紹介されているのだが、これがまた「森先生の手紙」中の表記と異なっているのでやっかいなのだ。特に大きな違いは漢字を除いた部分が、全文カタカナ表記であることである。しかしわたくしがここで問題とする肝心の傍線部④の箇所は、「子韻ヲ省ク例ナク」で一致している。

（8）「第三次岩波版『鷗外全集』〈第二刷〉収載の書簡錯簡考」。「『鷗外全集』の問題点と課題」（いずれも山崎一穎『森　鷗外論攷』〈おうふう、二〇〇六・十二〉所収）

(9) この最初の『鷗外全集』には、書簡は収録されていない。鷗外書簡が最初にその全集に収録されるのは、岩波書店からの第一回目の全集となった『鷗外全集』著作篇第二十二巻（一九三八・八）。この現場に小島政二郎はいたはずなのだが。

(10) 小島は「一葉の当時も鷗外は「文壇の神」だったが、その時も、私にとっては「文壇の神」というより外に言いようのない存在だった。その鷗外から、見も知らない私に「小島学兄」と書いた手紙が来たのだ」（「永井荷風」）と記している。

(11) 「初めはこわい上官のように思っていた職員たちも、先生の変らぬ温顔に接してうれしくなり、毎月二回、土曜日の午後集ることにし、先生から親しくお話をききたいとお願いしたところ、早速承諾されたうえに、先生の発案で、池田芦洲さんから「尚書正義」の講義、逸見仲三郎さんから「小倉百人一首」の講義をきき、その後を茶話会とすることになった。このふたりはいずれも編修課に勤めていた隠れた老学者であるが、先生は世間的でないこのような学者を心から敬愛しておられた。大矢透、桂湖南、大村西涯などと親交のあったのもそれである。池田、逸見両翁も感激し、蘊蓄を傾けてよい講義をされた。その時、一学徒の態度で最も真摯に質問をし、問題を提出されたのは鷗外先生であった。」（秋山光夫「博物館総長時代」（『文藝』一九六二・八）

(12) 小島政二郎「森鷗外」には、本稿で呈示したものの他にあと二通、鷗外書簡（葉書）が紹介されている。内容的にはさして重要なものではないけれども、こうした書簡をわざわざ小島に送るということ自体、鷗外の小島への配慮が窺える。以下に見るようにそれら二通は年代不詳なのだが、現全集に「年代不詳」書簡として一括まとめられた中に、「小島政二郎宛　（轉載）」とした上で入ってしかるべきものとは言えよう。

先生が几帳面な方であったことは誰でも知っている。どこかへお出掛けになる時には、前以って次のようなハガキを下さった。

千葉県夷隅郡東海村字日在
右ニ八月末マデ滞留
八月十五日　　森林太郎
×
奈良市、奈良帝室博物館官舎
右ニ十月三十一日ヨリ十一月二十三日マデ滞留　森林太郎

（小島政二郎「森鷗外」）

(13) 「澤木四方吉が欧州留学から帰って文科の刷新を思い立ち、先生を訪ねてその意中」を語ってスタッフ等の相談をしたことは、

前掲小島政二郎「森鷗外」に見える。なお、澤木は小島の恩師とも言うべき人物で、一九一九（大正八）年、小島が母校慶應義塾の予科講師となって教壇に立ち国文学を講ずるようになったのは、澤木の尽力による。

(14) 『美術の都』第二版（東光閣書店、一九二六・二）の「序」には、第一版を鷗外に献本した際の鷗外の礼状が、写真版で掲載されている。この鷗外書簡は、書簡番号「一一一九」として全集に収録。

(15) この「看るがまゝ、聞くがまゝ（ミュンヘンより）」は、まさに現地発の「椋鳥通信」ともいうべきもので（文体を含めてこれは「椋鳥通信」に酷似している。澤木は渡欧前に『スバル』誌上で同通信を読み、そのスタイルを真似たのではないか）、さまざまな文化的情報が発信されており、ドイツの「今」を知る上でも鷗外にとって特に興味深い読みものであったに違いない。

(16) 澤木はこのパリ滞在中に、「新生」事件で日本を逃れ同地に来ていた島崎藤村と出会い交流を深めている。『三田文学』一九一三年十二月号「消息」欄には、そうした模様を伝えるパリ発の澤木書簡が「永い手紙であるから所々抜き書きして」掲載されている。